「封建制から資本主義への移行」に関する
方法的諸問題 （その１）

松原智雄

Methodological Problems on ‘Transition from Feudalism to Capitalism’ (No1)

Tomoo Matsubara

要 旨

1950年代、1970年代と二度にわたって展開された「移行期論争」をふり返り、資本主義発展の特殊歴史性解明の方法の手続きとはなにかを探る。本稿では50年代の国際的論争であった「封建制から資本主義への移行」をめぐるスウィージーとドップ両旗旗の見解を検討し、同時に日本における代表的見解を概観する。問題は封建制から資本主義への過渡期における典型規定を商人資本の役割を軸にいかに設定するかにあるが、それにとどまらない方法論上の重要問題も伏在しているのではないか、ということを探る。（未完）

一．はじめに

1950年代初頭のマルクス主義歴史学の方法論上での一大国際的論争であった「封建制から資本主義への移行」をめぐる論争（以下、移行論争と呼ぶ）は、モーリス・ドップの『資本主義発展の研究』（京大近代史研究会訳、岩波書店刊）に対するスウィージーの批判に始まった。封建社会から資本主義社会への移行という過渡期の取扱いをめぐるこの論争は、欧米学界のほか、ソビエト、日本の研究者をも巻き込みではほどなくなり論争をくりひろげた。しかし、それにもかかわらず、それらは後を絵て収めることなく、ほどなく終止してしまった。我々は以下本稿でこの論争の中心点とその意義と限界をとり上げて検討課題としているが、このいわば忘れられたはずの「移行論争」が今日再びよみがえりつつある。50年代「移行論争」が主として欧米先進国の研究者の間での、特殊な問題意識に閉鎖的に関連する領域として設定された近代化をめぐる論争であったのに対し、今日のそれは現代世界の南北問題の激化の中で呻吟する発展途上の国々から生みだされた、文字通りの近代化をめぐる論争であった。つまり、前者が既に資本主義化を達成し第二次大戦後の社会主義国の飛躍的拡大の情勢の中で、資本主義から社会主義への移行を現実的課題とする過程で、それとの対比と連関のうちに「封建制から資本主義への移行」が論議されたとするならば、後者のそれは先進国の未曾有の発展の陰で、先進国の発展と反比例的に低発達・貧困が進行し、それとの苦闘を強いる第三世界の発展途上の国々の現状を歴史的に位置づけるため、「封建制から資本主義への移行」が直接的に関連づけられ、議論されているものみなしにしてよいであろう。資本主義世界体制の中にいわば取り残された形で存在する今日の発展途上の国々の歴史的位相は果たして如何なるものであるか、これこそが中心問題なのである。したがって、今日の「移行論争」の復活は50年代「移行論争」とはいささか質を異にする。50年代「移行論争」が示したヒルトンのいわゆる細かな実証に埋没し、その論点がいわば霧消しにわたったのに対して今日のそれは、その問題のもつラディカルさに必死的にマルクス経済学全体にわたる方法論的問題を提起し、その上に立っての第三世界解放の戦略戦術が解明されねばならぬ、という深刻で根源的な論争

＊助教授 一般教科 経済
に発展する。50年代「移行論争」の新版再現とも
いうべきこの日の新「移行論争」はA・G・フ
ランクらのいわゆる従属資本主義の主張に始まる
といってよいだろう。ラテンアメリカの近代化・
資本主義化をめりこみ開始されたフランク-マイク
従属論争はまさに方法論的には新版スウィジー・
ドップ論争の再現である。今日の南北の問題の深刻
さと世界的拡がりを反映し、地球の存じ地域でこ
うした論争が繰り広げられている可能性がある。
だが、この問題としてはもとくに、各国、各地域
の特殊性に具体的歴史発展の問題にとどまりな
い。社会構成体としての内質論や社会構成体の
世界史的発展の方向や傾向を問題とせざるを
えない。それは経済学の全体系の方法的問題に関わ
ざるをえない。事実、50年代「移行論争」も一例
ではこうした経済学の全体系に関わる方法的問題
解明への方向をさし示していたのである。しかし、
先のヒルトンの概念もあるように50年代「移行
論争」は細かく実質問題に至化されるとする結
果に終ったのは、当時、マルクス主義において圧
倒的な影響力を有していたソビエトマルクス主義
の教条、公式的理解（スターリン主義）に原因
があると思われる。公式主義的なソビエトマルク
ス主義の影響力は今日の新「移行論争」において
もみられるが、それらについては別途において明
らかにするとして、本稿では、今日再び世界的脚
光をあびるに至った50年代「移行論争」をふり返
り、その意義と限界を画定し、それらが今日の新
「移行論争」というべき世界資本主義＝従属資
本主義論争といかなる連関を有し、その理論的有
効性的範囲とはいかなる方法論的に明らかにした
いと考える。したがって、以下の論稿では実証＝
経済史的事実については、必要な範囲内で触れ
にとどめる。問題は事実的問題の方法的解釈にあ
らからである。

二、スウィジー・ドップ論争

(1) ドップの問題提起

50年代「移行論争」はドップの「資本主義発展
の研究」（以下、「研究」と略記）における次のよ
うな規定から始まった。つまり「ドップは封建社会
の解体期（14世紀末頃）からクロムウェル
革命（イギリス革命）期頃までは「我々の年代設
定によれば、その生産様式に関するかぎり、封建
的でなく、また資本主義的とも言えないもの
であったように思える」（ドップ「研究」29頁）
とのべ、ほぼ15-16世紀を封建制から資本主義体
制への移行を示す過渡期であるという時代規定を
与えた。こうした時代規定を与える理由はドップ
によれば次のようである。即ち「われわれは資本
主義時代の急をさかに場合に、生産様式の
なかで生産者資本家に対する直接の従属という
意味での変化が起こるときにはじめて、それをいい
当てなければならない」（ドップ「研究」26頁）か
らである。なぜなら、「純然たる商業階級の出現は、
それだけでは、いかなる革命的意義をもたない。
またその階級の勃興は、財政が工業と密接に関
結している資本家階級の出現の場をくらべる
と、社会の経済的類型に根本的な影響を及ぼすこ
とにおける少なからず、さらにまた、奴隷所有者であ
れ、封建領主であれ、支配階級の多くは商業を営
んだり、商人と密接に連絡を結ぶことができるけ
ど、商人階級のそれは、その活動が本質的に生産者
と消費者の間の仲介者の活動であるために、われ
われがすぐ上に述べてきたような完全に根本的で
排他的な意味において、支配階級になるという
効果を示すに至らない」（同上）からである。この
観点からみれば、資本主義の開始時期は16世紀の
後半ないし17世紀の初頭であると理解されるの
であり、従来ヨーロッパの歴史家に通念の、たと
えば、ピレネーなどの産業の主要中世末期（ほ
ぼ12世紀ごろから始まる）から存在するとする
「商業資本主義」の時代から資本主義が始まると
いうような主張は承服出来ない。16世紀末頃から
17世紀初頃にかけての時期こそ「資本家と雇
用された労働者たちの間の完全に成熟した関係とい
う形であろうと、または自分の家で働く家庭工業
者がかかわる「問屋制家庭工業型」で資本家に従属
するという未完成の形であろうと、資本が大規模
に生産に浸透しはじめた。」（ドップ「研究」26-7
頁）時期なのである。14世紀の「封建制の危機」
以後、ほぼエドワード三世からエリザベス一世に
至る200年間（ほぼ15-16世紀に相当）は、それ
ゆえ、「封建制から資本制度への過渡期であり、その
どちらともいえない性格をもつ時代」なのである。
このようにドップは17世紀のクロムウェル革命
（イギリス革命）をもってブルジョア革命とみな
し、それ以降資本主義の全面的な開花の開始時期で
あるとする。異なる社会構成体の移行の面には
革命が生ずるとするマルクスの唯物史観の公式を
ドップは忠実にイギリスにおいてはめたものとみて
間違いないまい。ドップはさらに18世紀の産業革
命の意義を次のように述べている。つまり「資本
主義の初期の、まだ未成熟の段階、つまり前資本主義的な小生産様式が資本の力に塗装され、資本に従属させられ、経済形態としての独立性を奪われているが、しかしその完全には変化させられていなかった段階から、資本主義が技術的な変化を基礎として、工場という集団的な大規模生産の単位に立脚する独特の生産様式を完成し、それによって生産者をかれらのこさされている生産手段の所有から絶対的に分離させ、資本家とその労働者とのあいだの単純で直接的な関係をいう立って
にいたる段階への移行（ドップ『研究』28 頁）をはたすとする。ここでドップは、封建制から資本主義の過渡的段階に加えて、資本主義の全面開花以後でも、産業革命によって画され次の二つの段階を区分しているのであって、その段階区分のメルクマールに資本に対する生産者の直接的従属関係
という事態を用いていることがわかる。

以上、ドップは14 世紀末頃からの封建制の危機
からはクロムウェル革命に至る「封建制で資本主義ではない」移行期（過渡期）の段階、17 世紀初頭から18 世紀末の産業革命に至る資本主義の初期的段階、それに産業革命以後というように
に14～19 世紀をほぼ三つの段階に区分するのである。だが、こうしたドップの段階区分の仕方に
は問題がある。後にスウィツムも批判したように、
この移行期と、アルジュア革で画期とされる資本主義の初期的段階の区分が必ずしも明確ではない。
後の行論との関係でここでは多少詳しくドップの段階＝時期抇分の方法を検討しておこ
う。

上に述べた通り、ドップによれば資本主義的生産
様式は「生産者の資本家に対する直接の従属」に
よって判断される。このことを基準にしてドップ
は、第一の移行期では一方で中世的支配階級が存
在すること、他方で商人アルジュアジーが台頭す
る時期であることを述べる。しかしこの商人アル
ジュアジーの利潤は「生産者が一般的に移転の自
由がなかったことと、生産者の貧弱な資力と由
来する場所的・時間的な価格差を利用することか
ら生じたもの」（ドップ『研究』29 頁）のものであ
る。それゆえ、この商人アルジュアジーの下では
「生産者の資本家に対する直接の従属」は存在し
なかったのであり、資本主義的生産様式とはみな
しえないとする。同時に、ドップはこの時期に至
ると「都市の手工業と裕福な、または中等程度に
裕福な自由土地保有者のなかには、すでに封建制
からの独立をもった形で行っていった生産様式を見る
ことができる」（同上）と述べている。だがドップ
によればそれは「それ自身のうちに資本主義的
関係の萌芽をふくみ、外からの資本に従属する
従属はもしかしてはいるけれども、それよりも資
本主義的ではない職人型か農民型の生産者兼所有
者の小生産」（同）にすぎず。封建的支配階級の
残存と資本主義的生産様式の萌芽の存在、こうし
たことによって移行期は特徴づけられているので
ある。

だがドップの手になる第二の時期区分、即ち16
世紀末〜17 世紀初頭にかけての、クロムウェル革
命に画期とする時代は次のよう規定されている
。つまり、この時代になると「完全に成熟した関
係」である労資の雇用関係という形で、『間
屋制工業』という形で、生産者の資本家
に対する直接の従属関係がみられる。しかし、
他方で、この時期は「資本主義の初期の、まだ
未成熟の段階、つまり前資本主義的な小生産様式
が資本の力に塗装され、資本に従属させられ、経
済形態としての独立性を奪われているが、しか
しまだ完全には変化させられてはいなかった段
階」（ドップ『研究』28 頁）である。この時代規定
はそのまま理解し得るものと考えてよい。ドッ
プが産業革命によって画される産業資本の時代は
「完全に成熟した関係」としての資本家と労働者
の関係が成立する時期とみなしていることは既に
見た。そしてそれは完全に正しい。産業革命こそ、
直接的生産者の手から小財産のみならず熟練的技
術という肉体に備わる特殊的財産をも奪い、完
全な無産者にして単純な労働力を転化し、資本
が労働力を商品として完全に支配する基礎を与
えた。マルクスが産業革命の技術的核心を動力機に
て伝達機にでもなく、作業機の革新にあると見
なしたのはこのことによる。資本は一般商品と同
様、労働力をも自由に商品として購入出来るよう
になって初めて、その本格的発展の時代を切り開
くのであり、それ以前における資本の労働力支配
形態は全くものではなかった。熟練にとくに手
工業の生産は生産によって、熟練労働者の部分
的熟練化を生み出しながらも、資本はしばしば、
こうした熟練労働力の狭隘な基礎に泣かされたの
である。このように産業革命によって「完全に成
熟した関係」としての労使関係が、労働力商品化
という生産過程の根底における変化の観点から把
握されるとするならば、ドップの画する第二の時
期である資本主義の初期期とはいささか変更の必要
が生じる、つまり、「完全に成熟した」労使関係は
たとえ存在していたとしても部分的であり例外的なものとみなさざるをええない。むしろ「間屋制内家工業」というような不完全の形での資本による直接生産者の支配の形態こそ一本的な労使関係であったとすべきである。だが、資本主義の初期時代が間屋制内家工業のような「前資本主義的な生産様式が資本の力に流され、資本に従属させられ、経済形態としての独立性を奪われているが、しかしこれ完全には変化させられてはいなかった段階であるならば、15～6世紀の「移行期」との区別はほとんど無くなる。先にも見たようにこの移行期にも資本と小生産層との関係には資本主義の初期段階と区别されるような質的変化は存在しなかったからである。せいぜい「規模も小さいさぎ、成熟の度合も充分ではない」（ドップ「研究」27頁）という量的な相異しかみつけることが出来ないのである。

ドップの段階区分が以上のようなあいまいな形となり、「移行期」そのものが結局スウィージーの批判を受けて封建制の時期とみなさざるをえなくなった（この点、後述）最大の理由は、今述べてきたように、「生産者が資本家に対して直接に従属する」関係の存否をドップが資本主義成立のメルクマールとしているところにある。この不明確な指標ではそもそもドップが拒否する「商業ブローチャージ」の役割が把握できない。ドップは「移行期」における「商業ブローチャージ」の意義を否定しつつ、他面で資本主義初期の「間屋制内家工業」を資本主義的生産様式とみなしてい。だから、この「間屋制内家工業」において小生産者が従属している場合を明らかに「商業ブローチャージ」だからである。

このようにドップの移行期規定は一方で資本主義的生産様式を端的にどこににおいて規定するか、それ自体、定義に至るような、社会構成体の理論的把握を問題とされているからである。同時に、その構築をもとにした、資本主義発展の時期区分の段階区分はいかにあらゆるべきかという問題も提起される。その場合、ここで焦点となったのはいまだも少なく資本主義の初期段階における「商人資本」の役割であった。原理的な意味における資本概念と商人資本的論理的枠組の問題である。こうした区別が必ずしも明確ではないため、移行期という特殊歴史的時期の分析を行なったところによくドップの限界があったのであり、ドップに従った50年代「移行論争」の多くの論者の基本的に同一な方法論的欠陥だったのである。

（ii）スウィージーのドップ批判

ドップの「研究」における移行期設定に対して、早く批判を加えてきたのはスウィージーである。スウィージーは封建社会が「使用のための生産システムである」（封建制から資本主義への移行）大東経済経済研究所訳、拓植書房、以下「移行」と略記）という立場から、これと基本的に反対する性格をもつ商業の役割の拡大をこそ封建制から資本主義への移行に決定的な重要性があるとする。ドップが封建制度と緊縛された小生産者の自己解放、変化の過程にこそ封建制の内部からの崩壊原因があるとする立場に対して、スウィージーは世界商業の発展という外部的外部の力量によって封建社会体の決定原因があるとするのである。この世界商業の発展に従い、封建社会の支配階級の権威が低下し、農民への剥削、収奪の強化による農民の逃亡が生じ封建制の危機が拡大したものと考えると、かくしてドップは「西ヨーロッパ封建制の法則と傾向を分析することを軽視したために、実際ににはこの体制にとって外部的な原因から生起したものとしてのみ説明しようとする歴史的発展を、その内在的傾向としてとりあげている」（「移行」40頁）とスウィージーは批判する。スウィージーによれば、こうした世界商業の発展によって解体を迫られた封建社会の後西ヨーロッパには「封建制と資本主義のつながる混合物ではなく」「封建的でなく資本主義的でもなかった」（「移行」50頁）過渡的期間が存在した。スウィージーはその過渡的体制を「前資本主義的商品生産」（同上）と呼んでいる。スウィージーによれば、ドップの移行期設定は必ずしも明確ではない。ドップの見解ではこの移行期には「安定、封建の生産様式はすでに解体のかなり進んだ段階に達していた」、売人ブローチャージが値と価値を増すにいたった。都市の手工業と裕福化、または中程度に裕福な自由保有農の興隆のなかに、すでに封建制からの独立をからとってしまった生産様式が認められる。多くの小保有農が……貨幣地代を支払っていた。そしてまた所領は大部分雇用労働によって耕作されていったのである。しかし、ドップは、これらの叙述のほとんどごとくに一定の限度をくわえ、さらに若農村部における生産者と領主および親朋とのあいだの社会関係は、中世的な性格の多を残しており、また少なくとも封建的秩序の外皮が多く残っていたとのべることによって全体をもっていられる。いずれにしろ、この時期は結局封建的であっ
たとドップは答えていと解されるのである」（『移行』47頁）とスウィージーは批判している。スウィージーのドップ批判は確かに当っている。と同時に我々が見たように、資本主義初期時
代の「クルムル革命＝産業革命前期」というのもその性格規定があいまいであった。ドップのように移行期を「封建的でもなく、また資本主義的ともちかいえない」としながら、事実上移行期を封
建社会に含めるのはそれから問題設定そのものが矛盾している。ドップはスウィージーの批判に答
えて、この移行期には支配階級は相変わらず封建的階級であったのである。したがってこの時期は封
建社会であったということを承認せざるをえなくなった（『移行』65頁）。封建的支配階級はイギリス革命
によって一掃されることになるのである。

だが、このドップのスウィージーへの反批判は的確ではない。元来、移行期の問題はその生産様
式をめぐって議論されていたはずだからであり、それを政治過程の議論に移すことは問題回
避以外の何者でもない。本来、移行期のような特殊な歴史的過程を取扱うばあいには単に経済的過程
にとどまらず政治的権力の役割の分析が不可欠である。「資本論」のような純粋な資本主義の経済
理論の原理的考察ならいざ知らず、封建社会という経済外的強制を社会存在の基盤としている社会
から資本主義への移行にはこのような政治的権力による経済外強制の役割を分析する必要がある。ドップ
やそれに従った内外の研究者は唯物史観の公式を教科書にあてはめ、この移行過程の分析を行なっ
たのであり、問題はこの社会の基礎過程である経済
分析にこそあるはずである。その経済分析の難
点をつかれて、単なる構造的分析権力問題における矛盾
を移しかえることなんとかして許されるべきこと
である。そこには方法論の欠落しか認めるこ
とが出来ないのである。資本家権力の分析＝国家論
次元は特に過渡期の場合にはその取扱いに方法的
考察を必要とする。単純に唯物史観の公式をあて
はめる訳にはいかないのである。しかし、ドッ
を始め、我党の高橋幸八郎（あるいは大塚史学）
などは、単純商品生産者層の両極分解を基軸に、資
本との階級。非階級という意味での機械的抽象
された範囲内で移行期という特殊歴史過程を
論じたのである。それ故、スウィージーが小生産
の生産様式を論じる場合には商業の役割を強調し、生
産様式そのものとしてはまさに「封建的でもな
く、資本主義的でもない」という「前資本主義的
商品生産」の段階概念を提起したのは純経済的過
程を見る場合、いわば当然の帰結であった。生産
者と資本の関係のみで移行期を見る場合（ドッ
プの場合は産業革命に至る時期まで含めて）近代
的労働関係としての労働力商品化はその完全な姿
を19世紀以後においてしか見ることは出来ない。
したがって、15～16世紀にとどまらず、産業革命
までは、資本の生産者の完全な従属はありえない。
スウィージーのドップ批判にはこうした意味
が含まれていたと考えることが、スウィージー自身も
実はこの点に関する限り余り明快とはいえない。

スウィージーはマルクスの有名な規定、「商品流
通は資本の出発点である。商品生産と、発達した
商品流通なわけ商業とは、資本が成立するための
歴史的前ludeをしている。世界貿易と世界市
場とは、16世紀に資本の近代の生活史を開始ので
ある」（『資本論』国民文庫版125頁。以下、『資
本論』からの引用は国民文庫版によると）という章
句を引用し、16世紀に至る世界貿易と世界商業の
発展をこそ近代資本主義の出発点があるとする。
このことは言うまでもなく正しい。スウィージーは
マルクスの「この叙述は、封建期から資本主義
への移行に関して、既述の私見同見ようの見解
が疑問の余地なく含まれている」（『移行』51頁）
とのべている。だがスウィージーは「われわれは、封
建期から資本主義への移行についてこのような
議論の方向を、あまり極端まで押し通れないよ
うに注意すべきである」（同上）と述べる。それと
いうのも「前資本主義的物品生産を、封建制、資
本主義および社会主義と等同、独自の社会体制
として分類することは極端すぎるようと思われ
る」（同）からである。つまり「実際のところ、こ
の体制全体の性質を決定する支配的な生産関係は
まったく存在なかった。いったんとして強い農奴制
のなごりと貨幣の活動の活発な開始があったが、
統計的な意味でもっとも一般的であった労働関係
の形態は明らかにかなり不安定なものであり、活
力ある社会秩序の基礎となることができなかった
」（『移行』51頁）からである。このようにス
ウィージーはマルクスに依りつつ、15～6世紀を
「前資本主義的物品生産」という過渡期の段階とみ
なすのである。だがスウィージーが依拠するマルク
スの考えはいさか異っている。即ちマルク
スによれば「資本主義的生産の最初の萌芽は、す
でに十四世紀および十五世紀に地中海沿岸やいくつ
かの都市で散在的に行われるといえ、資本主義
時代が始まるのは、もっと十六世紀からのことで
ある。資本主義時代が出現するところでは、農奴
制の廃止はとくにすんなりおり、中世の頂点をなす独立都市の存立もずっと以前から色あせてきてるのである」（『資本論』③ 361 頁）のであり、既に十六世紀は資本主義時代である。そこではいぜんとして強い農奴制のなごりどこか「農奴制の廃止はとくにすんんでいてな」のである。マルクスによれば資本主義成立の画期をなすのは本源の蓄積であり、そのなかでも「画期的なのは、人間の大群が突然暴力的にその生活維持手段から引き離されて無保護なプロクタリアートとして労働市場に投げ出される瞬間である。農村の生産者すなわち農民からの土地収奪は、この全過程の基礎をなしている」（同上）と述べている。この農民からの土地収奪を典型的に実現したのがイギリスであり、その「資本主義的生産様式の基礎をつくったりした変革の序曲は、十五世紀の最後の三の一期と一六世紀の最初の数十年間に演ぜられた」（『資本論』③ 364 頁）という。したがって十六世紀は既に資本主義の時代とみてよ。ではなにゆえ、スウィジーーは、マルクスに依って入り、マルクスとは異なる時期区分をなさざるをえなかったのか。15~6 世紀における世界商業の発展にこそ資本の近代的生産史が始まるという自身自身正しさマルクスの規定から出発しながら、なぜこの時期を「封建的でもなく、資本主義的でもない」とスウィジーーは強調せざるをえなかったのであるか。

スウィジーーはドップとは反対に商人資本の役割を高く評価している点で、この問題解決に近づいている。封建制から資本主義の時代への移行過程を果す商人資本の役割をかくこの問題を論じられないことはいうまでもない。だが、スウィジーーは商人資本の役割をより正確に理解しまなかった。それはマルクスの資本概念理解に関わる。マルクスは先にも引用した通り、世界商業の発展に資本の近代的生産史の幕開けがあると正確に理解しながら、その資本とは厳密において、産業資本を意味していた10。だが産業資本が本格的に展開するのはいうまでもなく産業革命後のことである。この資本概念にしたがって、資本の近代生活の本史は産業革命後、ほぼ十九世紀からになることになるのであり、16 世紀の本源的蓄積過程でも、ドップらのいうように 17 世紀クロムウェル革命後でもない。にもかかわらず、何故、15~6 世紀の世界商業の発展と 16 世紀の農民からの土地収奪が資本主義時代の幕開けなのか。それにはスウィジーーが正しく述べたように商人資本の役割を評価せねばならない。マルクスの「貨幣の資本への転化」の理論においても、資本形態には商人資本や高利貸資本が含まれるのであり、資本主義時代の幕開け時代における資本の役割を考察せねばならないのである。マルクスがいうように、商品形態は本来社会と社会の間で発生し、社会内部に浸透しつつ、それらに分解的影響力を与える。スウィジーーが強調したのはこの点である。社会に本来外的なものだが社会の根拠である生産過程を支配していく。ここに資本主義社会の特質がある。マルクスが古典派経済学の根本的難点として商品形態を区別しなかったとして批判したのもこのことに関わる。したがって、資本主義的生産様式は産業資本によって本格的に展開するとしても、その前段階には、商人資本のようなそれ自体社会を形成することの出来ない資本が生産過程を浸透し、支配力を強めていく資本主義の初期発展段階（発生期の資本主義）として明確に段階区分すべきなのである。その点で、ドップの明らかにした問題制内工業を資本主義初期の未熟な資本家陥の生産方法として、この時期の典型形態とすることは重要である。したがって、15~6 世紀の世界商業の発展の中心で得たそれ自体商品流通の一形態にすぎない資本の一形式商人資本が、生産者資本生産様式に支配を拡大し、流通と生産（形態と実体）が結合していく時期を区分する必要があるのである。それを「封建的でなく、資本主義的でなく前資本主義的生産品」とするのは病んでいる。

このように 50 年代「移行論争」代表的論者がともに、その規定を充分に与えなかったとするならば、それはマルクスの資本概念の再検討無く、ただそれを機械的に移行論争分析に当てはめたということにその原因の第一を求めることが出来よう。それは又唯物論の公式をあてはめただけのイギリス革命の評価についても同様に指摘しうることである。したがって、この問題の解明の方向は、商人資本の役割の更なる考察を前提とするのであった。

三、50 年代「移行論争」の評価

本項では 50 年代「移行論争」に対するわが国研究者の代表的見解をとりあげ、スウィジーー・ドップ論争の発展の方向性を確認しておくことになろう。

50 年代「移行論争」に参加した高橋幸八郎は基
本的にはドップと同一の見解を展開したのであり，ここで詳しく検討する必要はないが，高橋の特徴的な見解を一つだけ示しておこう。高橋はいうまでもなく大塚史学に依拠する研究者であり，大塚の局地的市場圏の理論とそこでにおける中小生産者の両極分解をもって資本主義成立の基本線とみる見解を表明した。これはマルクスの所謂「資本主義発展に関する二つの道」論のうち，中小生産者の資本家への転化という「革命的な道」の方を独歩までつきつめたものである。この大塚史学特有の見解の主観については別稿で詳しく述べており，大塚なにをもってそれと参照していただくことをする。ここではこの「二つの道」論の「革命的な道」の主に資本主義成立の基本線とみなし高橋がドップとの間で若干の意見の相違を見たところ，その意義についてお話しするにとどめる。

注8）従来述べておったように，ドップのmerchant manufacturersに対しては大塚と矢口平次郎の間に解釈の相違があった。これは矢口の解釈の方が正しいことを証明してみせたものであり，このドップと高橋のやりとりである。ドップの場合，資本主義の初期段階には屋屋制内工業のようなmerchant manufacturersが資本主義的生産様式の一種として存在することを認めていたが，高橋は商人資本の役割を完全に否定する立場から，屋屋制内工業のようなるものを資本主義成立の基本線から省くべきだと主張している。高橋のスウィージ・ドップ論争の評価は次の通りである。即ち，「ドップの提起のうち，とくにわれわれの関心をよびおこしたのは，資本主義制度や資本主義制度についての概念規定についての精密化のほかに，先ず何より，イリギスについていえば，貨幣地代が成立してから——したがって，古典的な意味における＜農奴制＞serfdomが消滅してから——＜資本主義時代＞に入るまでの二世紀間，エドワード三世からエリザベスまでの時期についての＜移行段階＞の諸問題についての，いわゆる社会経済史学派や旧来のマルクス主義歴史家と異なる処理の仕方についてであり，ドップが，資本主義（産業資本）の生成を超，生産様式petty mode of productionが封建的土壌所有の独立にしつつそれが分解してゆく過程のうちを把握している。このような基礎視角に関するものであった」（『西洋経済史講座』IⅢ巻26頁）。市民革命は「下から形成される独立自営農民階や上昇しつつある中国＝小資産経営者，商入などのうちに」その推進力が求められているのであり，特権の大企業や独占商人し金融業者などの上層プルジョアジーないし政治機関のうちにはない。「これはむしろ封建的反動として絶対王制の国家権力と結合し同母にして，プルジョア革命によって否定されるべきく保守的特性のもであった」（同上）したがってドップが「＜二つの道＞の問題をとりあげているばあいに，＜商人＝資本家＞の道を，＜商人製造業者によって組織された＞前貸与屋制あるいは前貸与制をもつとし，＜資本家＞をもして窓商に手を差し，より貧しい手工業者を前貸与屋制でして雇用している……企業者＞」（同上93頁）とみなすのは「明らかに矛盾に陥っているのである」（同上）。こうして高橋は「移行論争を産業資本の成立に歪曲し，その意味で，ドップに残されていた正しい側面をも否定するに至った。高橋も認めようとする」（『西洋経済史講座』III巻33頁参照）争点は資本資本の役割にあたった。だが高橋は物の観見てこの争点を消去してしまった。プルジョア革命であれ，産業資本の成立（これほどみも少なくなくして資本主義の成立と同義ではない。一つの社会体制の成立をその移行が問題とされるべきである）資本主義の発展段階論が産業資本の承継の問題に歪化されている）であれ，商人資本の役割を「反動的，封建的」として切り捨ててしまうと，これが高橋＝大塚史学のこの論争への総括と評価だったのである。しかし，問題は全く逆の方向に向かってこそ解決する。それを見たのが宇野弘蔵であった。

宇野もスウィージー・ドップ論争の「最も重要な問題点は＜封建制から資本主義への移行＞の時期における商人資本の役割を如何に評価するかということにかかっている」（宇野弘蔵『科学史の根本問題』95頁）以下の，＜根本問題＞と略記）とのべ。そしてこの封建制から資本主義への過渡期における商人資本の役割を論ずる場合に必要な方法論的前提の問題点として次のことを指摘する。封建社会や資本主義社会という社会構成体の生産様式を典型的に実現される国々は各々ちがうのであり，世界史的発展段階における封建制から資本主義への移行を論ずる場合，例えばイギリスにおいては移行とは当然區別されるべきである。事実，資本主義の典型国たるイギリスは封建社会の典型国ではない。むしろ，イギリス封建制はドイツ，フランスの封建制の典型と比して特殊な位置を与えられるのが普通である。スウィージー＝ドップ論争では全ての論争参加者にこうした区別が見られなかった。イギリス固有の
問題と封建制一般に固有な点の区別がつけられていないのである。第二に宇野は、唯物史観の公式にいう生産力と生産関係の矛盾一社会革命という図式がそのまま一国分析に教科的に適用されていないか、という問題点をあげる。それは第三にブルジョア革命の意義を社会構成体の画期的現象として社会革命主義と同様に考えてもいいか、という問題と関連している。いまでもマルクスによれば、人類の本質なる社会主義社会は人間の意識的革命によって達成されるのであり、このような性傾向に人類の前とこの相異（種差）があるとする「経済学批判要綱」序言、参照）とくにマルクスは資本主義社会を物の依存の社会とし、商品経済に基づく客観的自然法則が作用する点で特有の歴史的とみなしたのであった。ここでは勿論、人間の主観を超えた物理的法則（価値法則）が作用する以上、人間の意識的革命（ブルジョア革命）は必要ではない。資本主義を意識的に作り上げることは不可能だからである。ここに社会変革におけるブルジョア革命と社会主義革命の決定的相違があり、ブルジョア社会成立にブルジョア革命は不可欠なものではない。以上、宇野は過渡期における商人資本を論じる前提的事項として三つの論点を指摘した後、商人資本の取扱いを具体的に論じている。

宇野は商品経済は本来、社会と社会の間に発生するものであり、その役割は時には社会をより大きな生産単位に結合することもあり、旧来の社会関係に破壊的に作用することもある、と述べる。それ故、商品経済自身には新しい生活方法を生み出す力はないのであり、その影響を受ける社会関係如何によって社会の変革が生じる。したがって商品経済の発展の中には自然的に生み出される「商人資本」から封建制から資本主義への移行に際しても決して生産方法そのものの新しい展開の条件をなしものではない（根本問題97頁）。しかし、だからといって「封建的な生産方法そのもの、その内部で自立的に展開したものと解してよいことにはならない」（同）と、したがって、ドップや、更にそれを極端化した高橋＝大塚史学のように単純商品生産という小生産様式一般が資本主義を生み出す、というのではなく、資本主義を生み出す小生産様式というのは、一定の歴史的過程で「典型的な形態」をとって発展する小生産様式でなければならない。宇野のこの説明は誠ににくいが、世界商業の発展の中で成長していく、ギリシアの間屋制民間工業のようなものを指していると判断してよいであろう。（例えば、『資本論五年』上巻など参照）このようにそれぞれ自身が新たな生産方法を展開しない商人資本が、特定の歴史環境の中で小生産様式を支配していくことが、移行期の特殊な性格を明らかにするものであると宇野は述べている。移行が内部的なものか外部的なのかを想定するドップ・スヴィージーの注意点は「ドップが具体的な歴史的過程の分析を主眼としながら所謂生産力と生産関係との矛盾をそれぞれ分析の基礎として堅持しようとするのに対して、スヴィージーは実用的生産様式の世界史的な発展の類型的な展開を主眼とし、商人資本の役割を再評価するという」（根本問題99頁）にある。この宇野の考えは、先に見たようにスヴィージーが「前資本主義的商品生産」の時代を封建制から資本主義の移行期としたのに対し、ドップがそれを事実上、封建社会とみなしたことと関連する。ドップにとってはイギリス革命にいわる前階級の起動力としての生産力と生産関係の矛盾とその具体的表われとしての小生産層の分析こそが「歴史的展開の革命的な見解」だったからである。ここではイギリスの現象分析（経済史）がいわば原理的に行なわれているのであり、その更に極端化したものが高橋である他方、スヴィージーは世界史的発展段階の類型的把握を無意識的に行なつのつく、ドップと論争している訳である。

宇野はここで自らの三段階論を拡張しつつ「移行期論」の整理を試みているのであるが、「資本論」のような原理的把握（これは労働力商品化を基礎に恐慌論でその矛盾の解明が行なわれている）と、労働力商品化の歴史的形成段階を解明する資本主義の初期発展段階論をもって、「移行期」の現象分析がなされなければならない。それに対して、宇野資本の役割は不可欠であるという宇野の主張は重要である。この点からドップはともかく、スヴィージーの議論はこうした形態論であるかは世界史的研究に発展段階区分の方向を示している、と宇野は評価している。スヴィージー・ドップ論争は、現象分析と原理的把握の偏狭段階として世界史的発展の類型的把握（宇野の段階論）が明確とされることによつて解決の方向が得られ、その際、移行期における商人資本の役割の分析は不可欠だとするのである。

しかし、宇野によれば、まだ問題がある。過渡期を取扱う場合の特別に困難な問題である。スヴィージーは「前資本主義的商品生産」という
種の類型的規定を述べようとしているが、過渡期の「場合、その世界史の典型規定が、曖昧な地域を異にしてあらわれるために稍々困難になる」（「根本問題」102 頁）。マルクスは「例えばある時期にはオランダをポルトガルと比較し、次の時期にはイギリスをオランダに比較するという風に代表的な国々を次々に変えていっている」（「根本問題」103 頁）のであり、直ちに類型化が出来ないものとして過渡期が存在している。こうしたことから考えれば商人資本の役割も十六世紀前半を境にして異ったものとして考察する必要があるのではあるまい。……同じく旧生産様式に分解的役用をなすにしても、十六世紀後半以降にあってはそれは掌る資本主義の初期の資本を代表するという歴史的意義をもつている」（同上）と考えてよい。

ここでは我々が既に見たようにウィッケの 15～16 世紀全体を前資本主義の鳥生産という過渡期とみなす考え方に対する批判がなされていると思われる。それは宇野昭彦を前提にすることにより自明のこともといってよい。だが宇野の見解はまだ判然としない。というのは 16 世紀以前には異なった役割を果たす商人資本を前提にして、一種の典型的規定のようなものが可能なのか否か。その点、宇野の見解はなお明確ではない。宇野の見解に残る不明確さは 50 年代「移行論争」の限界に規定されていることなるか。どうか。この点、更に考究を要する。

（未完）

注

1）P. スウィカー「モリス・ドップへの批判」（「経済研究」第 38 巻 1 号、なお本稿では N L B 版、ヒルトン序章に付した翻訳「封建制から資本主義への移行」大阪経済大学経済研究所訳を用いる。

2）「西洋経済史講座」第 3 載「総説」における高橋幸八郎による論争の経過の紹介を参照されたい。

3）ヒルトンは前掲の序章で、この論争の限界の一つとして、実証的研究の不備をあげている。「封建制から資本主義への移行」序章参照。しかし、後述するように問題は単に実証の問題にとどまらない。それを解釈する方法論こそが問題だったのである。

4）フランク＝ラクラウ論争についてはさああたり湯浅信男「第三世界的経済構造」（新評論、1976）、望月清司「第三世界を包むする世界史像」（「経済評論」1981 年 4 月号）などを参照。

5）中近東やアフリカをめぐる研究は一部、日本にも紹介されている。ロドニー「世界資本主義とアフリカ」（拓殖書房）、アミン「アフリカ世界」（新評論）、同「世界は周辺部から変わる」（第三書房）など。なお、中南米ではフランクの著作の他いくつかの重要な方法的視点を含む馬場宏「プラジル経済の点と面」（エコノミスト）1982 年 11 月 16 日号も参照。

6）ピレンヌ「資本主義発展の諸段階」（未来社）、ゾムドルト Der Moderne Kapitalismus などが「商業資本主義」の代表者にあげられている。このゾムドルトを批判したものとして大塚久雄「社会変革とはなにか」「大塚久雄著作集」岩波書店第 9 巻所収）があるが、ゾムドルトの初版と M. ウェーバーの批判を受け入れた再版との相違が必ずしも明確ではない。

7）このことについては、ヒルトン「封建制の危機」（未来社）などがある。

8）ドップと基本的に同一の見解を有する高橋幸八郎はドップの merchant manufacturers、（問屋制家庭工業）には反対している。しかし高橋の高く評価する大塚久雄を如何に文字通りのマニュファクチュアと誤解し、自説の非難を試みた（大塚久雄「欧州経済史序説」大塚久雄著作集第一巻）しかし矢口考次郎は大塚のドップ解釈が誤りであることを及早に批判していた（同「資本主義形成期の研究」有斐閣）。なおこの点について詳しくは横溝「宇野昭彦論争批判の諸説」（隆隆・清水共編「宇野昭彦蔵の世界」（仮題、有斐閣刊未定））を見られます。

9）イギリス革命の本質理解は、この移行論争と並行して行なわれた重要な課題であった。この点については差し当たり、リチャード・ソーン「イギリス革命論争史」（刀水書房）、ヒル「イギリス革命」（成文社）、ストーン「イギリス革命の原因」（未来社）などを見よ。とにストーンの研究は興味深い。なおこの問題の理論的整理の中で最もすすめたのは大谷谷郎「ブルジョア革命」（有斐閣書房）で示されている。

10）この本論の著者、柳谷喜和を含む研究者からの土地取収にも多岐の実証研究があり、マルクス説を否定する傾向が強い。しかし、それは単に量的範囲の問題ではなく質的問題として把握されなければならないのであう。量（実証の多少）は問題ではない。社会変革の点からして重要な点である。この点については福留久太「15-16 世紀英国農民の小農」（日高他編「マルクス経済学」東出版会、所収）を参照。

11）『資本論』第 1 卷第 4 章「貨幣の資本への転化」の論理の流れを見れば、この点は一目瞭然である。
12）前掲箇稿「宇野校臨時批判の所感」参照。
　（昭和57年11月25日受理）